



Title	陳士元『夢占逸旨』内篇訳注（五）
Author(s)	清水, 洋子
Citation	中国研究集刊. 2012, 54, p. 56-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58049
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

陳士元『夢占逸旨』内篇訳注（五）

清水洋子

はじめに

本編は、陳士元『夢占逸旨』内篇訳注の第五稿である。衆占篇および宗空篇を対象とした「陳士元『夢占逸旨』内篇訳注（四）」（『中国研究集刊』岷号（第五十三号）、大阪大学中国哲学学会、二〇一一年）に続き、本編では古法篇を訳注の対象とする。

凡例

・『夢占逸旨』の底本は、陳士元撰『帰雲別集』（道光十三年心城呉毓梅校刊同治十三年修補本）所収本（以下、「帰本」と称す）を使用し、呉省蘭輯『芸海珠塵』（民

国五十七年台北芸文印書館景嘉慶中南匯呉氏聽彝堂刊本）所収本（以下、「芸本」と称す）を校本とする。

・本文には【原文】【書き下し文】【現代語訳】【語注】を付し、自注には【原文】【書き下し文】を付す。

・底本と校本との異同については、【原文】中の傍線部と丸数字とで示し、【校異】で詳細（校訂を要する場合など）を挙げる。

・旧字体や異体字は、必要な場合を除き新字体に改めた。

・文意の補足は〔 〕で、注記は（ ）で示した。

・自注の引用文に出拠が明示されていない場合は、可能な限り補い、【書き下し文】の中で示した。

・自注の引用文には、陳の翻案あるいは誤引と思われるものもある。参考として、出拠の原文を本編末の注に付す。

古法篇第八

【原文】

【本文】古法亡而夢不可占矣、帝王有帝王之夢、聖賢有聖賢之夢、輿台廝僕有輿台廝僕之夢、窮通虧盈、各緣其人。凶人有吉夢、雖吉亦凶、不可幸也、

【自注】

如趙嬰夢天使之類、

【校異】

①芸本は、「矣」を「已」に作る。

②芸本は、「不」の上に「吉」を付す。

【書き下し文】

【本文】古法亡びて夢占うべからざるなり。帝王には帝王の夢あり、聖賢には聖賢の夢あり、輿台廝僕には輿台廝僕の夢あり。窮通虧盈、各おの其の人に縁る。凶人に吉夢あれば、吉なりと雖も亦た凶にして、幸いとすべからざるなり。

【自注】

〔『左伝』成公五年〕趙嬰天の使を夢みるが如きの類なり（注し）。

【現代語訳】

古法がなくなり、夢は占うことができなくなつた。〔とはいへ〕帝王には帝王の夢があり、聖賢には聖賢の夢があり、召使には召使の夢がある。〔夢により得られる験が〕困窮・衰退となるか、賛誉・栄達となるかは、各人〔が吉人か凶人か〕による。凶人が吉夢を見た場合、〔夢象が〕吉といえども〔験は〕凶なのであり、幸いとすることはできない。

【語注】

○古法……古来より伝わる法。「蜀人趙賓好小數書、後為易師易文、……持論巧慧、易家不能難、皆曰非古法也。」〔『漢書』儒林伝〕ここでは古代の為政者が夢を占う際に用いたとされる術法を言う。「先王致察於天人之際、可謂密矣、惜乎、古法不伝也。」〔輔広『詩童子問』〕、「王者、於天日也、夜有夢則晝視日旁之氣以占其吉凶。凡所占者十輝、每輝九變此術今亡。」〔『周礼』宗伯下〕「其經運十其別九十」鄭玄注〕○輿台廝僕……召使などの卑賤な身分にいる者。「輿、衆也。…僕、僕豎主藏者也。台、給台下微名也。」〔『左伝』昭公七年〕「人有十等」孔穎達疏〕「廝、析薪者。輿、主駕車者。此皆言賤役之人。」〔『漢書』嚴助伝〕「廝輿之卒」顔師古注〕（注し）。○凶人有

吉夢、雖吉亦凶、不可幸也……夢を見た後の禍福は、最終的に夢見た本人の徳性如何で決まることを言う。次節の内容と対をなす。「且凡人道見瑞而修徳者、福必成。見瑞而縱恣者、福転為禍。見妖而驕侮者、禍必成、見妖而戒懼者、禍転為福。」(『潜夫論』夢列) ○趙嬰夢天使之類……宗空篇に既出。晋の趙嬰齊は甥(趙朔)の妻(趙莊姬)と淫通したことで、兄(趙同と趙括)から齊への追放を言い渡される。「夢天使」は、天を祭れば禍を免れると天の使者から告げられる夢。この夢について貞伯は、「淫事を行いながら罰を受けないのは福であり、天を祭れば禍から逃れられる」と解した。嬰齊は天を祭りその翌日に逃亡したという。これは「凶人」である嬰齊が最終的に凶を免れるという「幸」に至った話であり、本文の文脈と一致するとは言えない。ただし、趙氏没略については諸説ある。『左伝』には、嬰齊追放を恨んだ趙莊姬の計略で趙氏が没落に追い込まれたとの後日談が見えるものの、嬰齊が災禍に遭うとの記述は見られない。一方『史記』趙世家には、嬰齊を含む一族誅殺の記載が見えるため、本書がこちらに依拠した可能性は高い(注3)。

【原文】

【本文】 吉人有凶夢、雖凶亦吉、猶可避也、

【自注】 如董豊所避之事、

【校異】

① 芸本は、「猶」の上に「凶」を付す。

② 芸本は、「避」の下に「枕沐」の二字を付す。

【書き下し文】

【本文】 吉人に凶夢あるは、凶と雖も亦た吉にして、猶お避くべきなり。

【自注】 (『晋書』符融伝) 董豊の避くる所の如きの事。

【現代語訳】

吉人に凶夢があるというのは、「夢象が」凶のように思えてもそれは「験として」吉であるから、「凶事は」回避できる。

【語注】

○董豊所避之事……董豊の夢は以下の通り。馬を南に走らせて川を渡った後、北に引き返して川を渡り、更にまた南に戻る。しかも馬は川の途中で止まり、鞭を打って

も動かない。うつむくと二つの太陽が水面下にあり、馬の左側にある太陽は白く湿気ていて、右側の太陽は黒く乾燥していた。董豊はこの夢を不吉なものかと疑ったが、実際はこの夢のお陰で、自身を殺害しようとした男と妻の陰謀と、自身にかけられた妻殺しの容疑という凶事を回避した(注4)。

【原文】

【本文】 是故夢有五不占、占有五不驗、

神魂未定而夢者不占、

【自注】

輔広曰、詳占夢之意、先王致察於天人之際、可謂密矣、惜乎、古法不伝也、後世之人、情性不治、昼之所為猶且昏惑瞽乱不自知覺、則其見於夢寐者、率多紛紜乖戾、未必与天地之氣相流通、縱有徵兆之可驗者、亦須遲迴隱約、必待既驗、而後可知、古法若存、未必能尽占也、

【校異】

① 帰本、芸本共に「謹」に作る。ここでは『詩童子問』に従い「察」に改めた。

② 芸本は「迂回」とする。

【書き下し文】

【本文】

是の故に夢に五不占あり、占に五不驗あり。神魂未だ定まらずして夢みる者は占わず。

【自注】

輔広(「詩童子問」)曰く、「占夢の意を詳らかにすれば、先王 察を天人の際に致すこと、密と謂うべし。惜しいかな、古法の伝わらざるや。後世の人、情性治まらず。昼の為す所すら猶お且つ昏惑瞽乱し自ら知覺せずんば、則ち其の夢寐に見る者、率多くは紛紜乖戾し、未だ必ずしも天地の氣と相い流通せず。縦い徵兆の驗とすべき者あるも、亦た須らく遅迴隱約し、必ず既に驗あるを待ち、而して後に知るべし。古法若し存するも、未だ必ずしも能く占を尽くさざるなり。」(注5)

【現代語訳】

【本文】 だから夢には五不占(占わない五つの状態)があり、占には五不驗(的中しない五つの状態)がある。「五不占の一」精神が不安定な状態でみた夢は占わない。

【自注】

輔広が言うには、「占夢の義理を詳しく述べると、それは先王が天人の間(の諸現象)を洞察し明らかにすることであり、奥深いものと言える。惜し

いことだ、古法が伝わらないのは。後世の人間は情性が治まっていない。昼間の行いまで惑い乱れていてそれを自覚することがないならば、夢に見る多くはデタラメで、必ずしも天地の気と通じ合うものではない。たとえ予兆となるものがあつたとしても、それはふらふらとさまよっていてはっきりわからず、必ず夢の験が「現実となつて」あらわれてから「ああ、あの時の夢はこういうことだったのか」と知ることができる。「だから情性が治まっていない以上、」古法が現存していないとしても、きつちりと占えるわけではない。」

【語注】

○是故夢有五不占、占有五不験……古法が存在しないこと、夢の応験は夢象の吉凶だけで決まらないことを前節で問題提起した上で、占夢における禁忌である「五不占」「五不験」の説に及ぶ。これにより、天地と疎通しうる人間の精神および行為が占夢に不可欠であることを示す。○輔広……南宋の人（生卒年不明）。字は漢卿、号は潜庵。呂祖謙、朱熹に師事した。その学説は『四書纂疏』にも見える。『詩童子問』は、『詩集伝』の理解を補助するために朱子の教えや諸儒の説を録し、読詩の法

を明かにしたものの。○昏惑瞽乱……暗愚で惑い乱れるさま。『楚辭』九辯「中瞽乱兮迷惑」王逸注に「思念煩惑」とある。○紛紜乖戾……雑多なものが入り乱れ、本来のあるべき状態から外れること。「紜、……数乱也。」（『玉篇』）○未必与天地之氣相通……氣を介し天地と一体化する点に人間性の向上を認めるといふ宋学の思考を反映した箇所だと考えられる^{〔注〕}。○遲廻隱約……まわりくどく不明瞭なこと。○未必能尽占也……「尽」は詳しくする、余すところなく出す。「書不尽言、言不尽意。」（『易』繫辭伝上）

【原文】

【本文】 妄慮而夢者不占、

【自注】 六書精蘊、其夢也邪、昼有邪想也、其夢也漫、昼有漫想也、

【校異】

①芸本は、「漫」を「慢」に作る。

【書き下し文】

【本文】 妄慮して夢みる者は占わず。

【自注】『六書精蘊』、其の夢みること邪なるは、昼に邪想

あればなり。其の夢みること漫なるは、昼に漫想
あればなり（注）。

【現代語訳】

妄りな考えの結果として見る夢は占わない。

【語注】

○妄慮而夢者……思念の具体的な性質と夢との相関関係
について言及する。昼間の想念が夢に反映されることは
比較的早い時期から認知されていた。「三曰思夢。」（『周
礼』春官・宗伯）「覚時所思念而夢。」（鄭玄注）、「昼有
所思、夜夢其事。」（『潜夫論』夢列）、「昼想夜夢、神形
所遇。」（『列子』周王穆）○六書精蘊……元の魏校撰。
文字を象数・天文など十二類に分別する字典。古文で小
篆の誤りを正し、また小篆で古文の足りない部分を補う。

【原文】

【本文】 寤知凶阨者不占、

【自注】 如声伯寤知凶阨而強占之類、左伝、声伯夢涉洹、

食瓊瑰泣且歌焉、寤而懼不敢占也、及従公伐鄭至

於狸脈^①之地而占之曰、余恐死、不敢占、今過三年
衆繁而従余矣、無傷也、占之、是暮声伯卒、杜預^③
注云、伝戒数占夢、

【校異】

- ① 帰本は「服」に作る。ここでは、芸本、『左伝』に従
い「脈」に改めた。
- ② 芸本は、「不」の上に「故」を付す。
- ③ 帰本は「占夢」の下に「云」を付す。ここでは芸本に
従い「云」の位置を改めた。

【書き下し文】

【本文】 寤して凶阨なるを知る者は占わず。

【自注】 声伯寤して凶阨なるを知るも強いて占うが如き

の類なり。『左伝』（成公十七年）、声伯夢に洹を
渉り、瓊瑰を食らい泣きて且つ歌う。寤して懼れ
敢えて占わざるなり。公に従い鄭を伐ち狸脈の地
に至るに及びて之を占いて曰く、「余死を恐れて
敢えて占わず。今三年を過ぎて衆繁く余に従う。
傷なうことなきなり」と。之を占う。是の暮れに
声伯卒す。杜預注に、「伝 数ば夢を占うを戒む」
と云う（注）。

【現代語訳】

夢から覚めて、それが凶兆だとわかるような夢は占われない。

【語注】

○声伯夢涉洹、食瓊瑰泣且歌焉……洹水（衛河の支流として現在の河南省北部を流れる）を渡つた魯の声伯（子叔嬰齊）が何者かに瓊瑰（珠玉）を食べさせられ、その涙が珠玉になり懐に満ちた夢。宗空篇に既出。○従公伐鄭至於狸脈之地……鄆陵の戦い（成公十五年、BC575）の後、魯成公らによる鄭への攻撃が始まると声伯は従軍し、帰国時には狸脈へ立ち寄つた。成公十七年経文に「冬、公、会单子・晋侯・宋公・衛侯・曹伯・齊人・邾人伐鄭」「公孫嬰齊卒于狸脈」、孔穎達疏に「狸脈、魯地也」とある。○今過三年衆繁而従余矣、無傷也……三年という時間の経過と臣下の増加によって、声伯が凶夢への警戒を解いたことを言う。このことは、他者からの「吉の集中」や他者への「凶の分散」という觀念があつたことを示唆する（注9）。例えば「猷吉夢于王、王拜而受之」（『周礼』春官・占夢）は、他者の吉夢を王のもとに集める王へのことほぎのようなものだと考えられる。○戒数占夢……占夢に限らず、占断ではむやみに占うことはしない

とされた。「卜不習吉（卜法では前回の吉に重ねて再度卜することはできない）」（『尚書』虞書・大禹謨）、「卜筮不相襲也（卜筮は互いに重ねて行わない）」（『礼記』表記）

【原文】

【本文】 寐中撼病而夢未終者不占、

【自注】 撼者、人擾之使覺也、病皮命切、驚病也、故夢因之不能終也、

【校異】

①芸本は、「夢景不終」とする。

【書き下し文】

寐中に撼かされ病えて夢未だ終わらざる者は占わず。

【自注】 撼は人の之を擾して覺ましむるなり。病は皮命の切。驚病なり。故に夢は之に因りて終わること能わざるなり。

【現代語訳】

睡眠中に揺さぶられたり、精神不安による発作が起き

て目を覚ましたために完結しなかった夢は占わない。

【語注】

○撼……揺り動かすこと。「撼」に通ずる。「撼、揺也。」
〔説文〕「人擾之使覺也」の「擾」は、外的な刺激を与えて夢見の状態を中断させることを指す。○病……「驚病（風驚）」は精神不安や痙攣などの症状を引き起こす神経性疾患（注）。病理的原因に由来する「恍惚寢寐不安」
「令人寐即驚恐憂恚」〔太平聖恵方〕卷二十）などの睡眠障害によって夢が中断される場合を想定するものと考えられる。単に悪夢を見て目を覚ますのは「驚魘」。

【原文】

【本文】 夢有終始、而覺佚其半者不占、

【自注】 夢畢而覺、或忘其始、或忘其終、非全夢也、

【書き下し文】

【本文】 夢に終始あるも、而るに覺めて其の半なかばを佚いっする者は占わず。

【自注】

夢畢おひりて覺むるに、或いは其の始めを忘れ、或いは其の終わりを忘るるは、全き夢に非ざるなり。

【現代語訳】

夢自体は終始完結していても、目覚めてその半分を忘れてしまった夢は占わない。

【原文】

【本文】 占夢之人、昧厥本原者不驗、

【自注】 夢有本原、能通ト本原、則天地人物与己一也、

【校異】

①芸本は、「通」の下に「乎」を付す。

【書き下し文】

【本文】 占夢の人、厥その本原くわんに昧くらき者は驗たせず。

【自注】 夢に本原あり。能く本原に通ずれば、則ち天地人物と己とは一なり。

【現代語訳】

占夢する人間が占夢の原理に暗ければ的中しない。

【語注】

○夢有本原、能通本原、則天地人物与己一也……『夢占

逸旨』は「真宰（万物創造の根源）」から宇宙生成論と夢の生成理論を説く（真宰篇を参照）。「夢有本原」とは、「真宰」から生じた陰陽二気を受ける天地人はもちろん、それらが見る夢も本源的な妙理を含んでいることを言うのであろう。（『夢占逸旨』は天地も夢みる主体と考える。）そうした夢の本原に通ずるといふことは、自身の気と天地万物の気との間に融和・循環の關係が成立することを意味する。「天地人物与己一」は、理念としての一体感を表す宋儒の言葉とも似る。「大而化之、只是謂理与己一。」（『二程集』河南程氏遺書卷十五）、「告顔子以克己復礼、克去己私以復於礼、自然都是這意思。……此意思纔無私意間隔、便自見得人与己一、物与己一、公道自流行。」（『朱子語類』卷六）

【原文】

【本文】 術業不專者不驗、

【自注】 占夢之術、必專習乃驗、

【書き下し文】

【本文】 術業の専らならざる者は驗せず。

【自注】 占夢の術は、必ず專習すれば乃ち驗す。

【現代語訳】

占夢の技術に専念しない者は的中しない。

【語注】

○術業不專者……ここでの「専」は、占法を占夢に限定するという意味ではなく、占夢の専門的知識や技術を持つことを言うと考えられる。伝世文献に見える占夢者の身分は、占夢専門家・非専門家・他の占いと兼習者など多様である。また、具体的な占夢の過程では、象徴解釈・類推解釈・文字解釈などのほか（注①）、周易理論を併用するものも見られる。本節の要点は、専門的身分の有無というよりも、より総合的かつ専門的な技術を駆使できる能力の有無にあると言える。

【原文】

【本文】 精誠未至者不驗、

【自注】 精誠不通鬼神、不可占夢、

【校異】

①芸本は、「通」の下に「乎」を付す。

【書き下し文】

【本文】 精誠 未だ至らざる者は験せず。

【自注】 精誠 鬼神に通じざれば、占夢するべからず。

【現代語訳】

純真で精一な真心が鬼神に通じるレベルに至らない者は的中しない。

【語注】

○精誠……真心、誠意。王符は「唯其時^①有精誠之所感薄、神靈之所告者、乃有占爾」(『潜夫論』夢列)とし、混じりけのない真心で感受した夢は占う意義があるとしている。中でも孔子が見たという周公の夢については、周公への精一な思いから見た夢と解釈されている。「孔子生於乱世、日思周公之徳、夜即夢之。此謂意精之夢也」(『潜夫論』夢列)程伊川による「聖人存誠処也」(『二程集』河南程子遺書卷十八)との解釈も同様(注12)。
○精誠不通鬼神……「鬼神」の含意には複数ある(注13)。
【五不験】は、夢の吉凶を正確に汲みとることを目的とする。そのため(こ)での「鬼神」は、精誠を通して初めて知りうる総体的な変化そのものを指すと思われる。「与鬼神合其吉凶」(『易』乾文言伝)のように、千變万

化の働きを伴う神靈のことを言うのであろう(注14)。本節

は、鬼神の意向を通達する卜筮と同様の性格を占夢にも見出し、当人の誠心次第で吉凶禍福の変転を感受できることを強調している。「卜筮通鬼神之意」(『尚書』虞

書・大禹謨「鬼神其依、龜筮協從」孔穎達疏)

【原文】

【本文】^① 削遠為近、揉大為小者、不験、

【自注】 漢芸文志、*、弁阨之患、吉隆之喜、此聖人知命之

術也、道之乱也、患出於小人強知天道、壞大以為小、削遠以為近、是故道術破裂而難知也、

【校異】

① 芸本は、「削遠為近小者」とする。

② 芸本は、「漢」の下に「書」を付す。

③ 芸本は、「故」を「以」に作る。

* 芸本は、「芸文志」の下に「曰」を付す。

【書き下し文】

【本文】 遠きを削りて近しと為し、大なるを揉めて小なりと為す者は験せず。

【自注】『漢芸文志』、凶厄きょうやくの患、吉隆の喜を弁べんずるは、

此れ聖人の知命の術なり。道の乱るるや、患は小人強しいて天道を知らんとし、大なるを壊して以て小なりと為し、遠きを削りて以て近しと為すに出づ。是の故に道術破砕して知り難きなり（注15）。

【現代語訳】

【本文】 深遠なものを削って浅近なものとし、広大なものを歪曲して狭小なものとする者は的中しない。

【自注】 『漢書』芸文志、「凶厄の憂患や吉祥の喜びを識別するのは、聖人が天命を知る術である。〔ところ
が〕治道が乱れると、小人が無理に天道（自然の法則）を知ろうとして、広大なものを狭小なものに、深遠なものを浅近なものにするという弊害が現れた。こうして道術（天道を知る手だて。またはそのための道徳学問）は打ち砕かれて、知ることが難しくなってしまった。」

【語注】

○削遠為近、揉大為小者……「揉」は曲げてたわめること。○此聖人知命之術也……天地から享受する天性や天命を見極める術が聖人にあること。「易与天地準、故能

彌綸天地之道。仰以觀於天文、俯以察於地理、是故知幽明之故。……知周乎万物而道濟天下、故不過。旁行而不流、樂天知命、故不憂。」（『易』繫辭伝上）「是自知性命、順天道之常數、知性命之始終、任自然之理、故不憂也。」（孔穎達疏）○患出於小人強知天道……小人が無理に天道を知ろうとして混乱を招くこと。「小人蓋指張寿王之徒、見律曆志。」（顧実『漢書芸文志講疏』）（注16）「天道」は天の運行、転じて天の道理。「天道遠、人道近。」（『左伝』昭公十八年）、「孔子論六經、紀異而說不書。至天道命不伝。」（『史記』天官書）○道術……天道を知るための手だて（注17）。

【原文】

【本文】 依違匿端者不驗、

【自注】 如幡綽占禄山怪夢之類、柳氏旧聞^②、安禄山叛、黄幡綽陷在賊中、禄山夢衣袖長至階下、幡綽曰、当垂衣而治、禄山又夢殿中窓榻倒、幡綽曰、革故從新、後禄山敗、玄宗自蜀歸詰問幡綽、幡綽曰、臣昔占夢必知其不可也、玄宗曰、何以知之、对曰、衣袖長者、出手不得也、窓榻倒者、胡不得也、玄宗笑而赦之、

【校異】

- ① 帰本、芸本ともに「両」に作る。しかし、『韓非子』二柄篇に「君見悪、則群臣匿端。君見好、則群臣誣能」とあり、『論衡』答佞篇に「佞人依違匿端」とあることから、「両」は「匿」の誤と考えられる。よって、ここでは「匿」に改めた。
- ② 帰本は「白」に作る。ここでは芸本に従い「旧」に改めた。
- ③ 帰本は「倒文」、芸本は「倒立」とするが、ここでは『次柳氏旧聞』に従い「倒」に改めた。

* 芸本は、「柳氏旧聞」の下に「曰」を付す。

【書き下し文】

【本文】 依違して端を匿す者は験せず。

【自注】 〔黄〕 幡綽〔安〕 禄山の怪夢を占うが如きの類。

〔次〕 柳氏旧聞、安禄山叛く。黄幡綽 陥りて賊中に在り。禄山 衣袖の長く階下に至るを夢みる。幡綽曰く、「当に衣を垂れて治むべし」と。禄山 又た殿中にて窓櫺の倒るるを夢みる。幡綽曰く、「故きを革め新しきに従う」と。後に禄山 敗れ、玄宗 蜀より帰りて幡綽に詰問す。幡綽曰く、「臣 昔占夢し必ず其の不可なるを知るなり」

と。玄宗曰く、「何を以てか之を知る」と。対えて曰く、「衣袖の長きは、手を出さんとするも得ざるなり。窓櫺倒るるは、胡せんとするも得ざるなり」と。玄宗笑いて之を赦す。

【現代語訳】

曖昧な態度をとり、本心の糸口（または兆し）を隠すものは的中しない。

【語注】

○ 依違……曖昧な態度を取ること。「孔子之言、解情而无依違之意。」（『論衡』問孔）○ 如幡綽占禄山怪夢之類……黄幡綽（生卒年不明）は唐の玄宗に仕えた宫廷音楽家。事跡は『因話録』『樂府雜録』に見える。謀叛を起こした安禄山に捕らえられるも、禄山の夢を都合の良いように解釈して保身を図った。○ 柳氏旧聞……李德裕撰『次柳氏旧聞』のこと。撰者が伝聞した玄宗時の宦官高力士による宮中の回想録を収める。○ 窓櫺……「櫺子」「亮櫺」とも。上半分が格子状になったスタンド式の窓。扉に似たしきり。「軒轅作帷帳、禹作屏、伊尹作亮櫺、周公作簾。」（『広博物志』卷三九）○ 胡……『蟬精集』が引く『次柳氏旧聞』には「糊」とある。「胡」には

「糊」の意もある。(「胡粉、胡、糊(「糊」と通用)也。」「釈名」) 倒れた窓は貼り付けられないこと(糊不得)と、胡人の安祿山に天下は取れないこと(胡不得)を兼ねた表現か。

【原文】

【本文】 故必有大覚、而後能占乎大夢、

【自注】 莊子、方其夢也、不知其夢也、夢之中又占其夢

焉、覺而後知其夢也、且有大覚而後知此大夢也、
① 愚者自以為覚、竊竊然知之固哉、

【校異】

① 芸本は、「愚」の上に「而」を付す。

* 芸本は、「莊子」の下に「曰」を付す。

【書き下し文】

【本文】 故に必ず大覚あり、而して後に能く大夢を占う。

【自注】 『莊子』〔齊物論〕、其の夢みるに方りて、其の夢

なるを知らざるなり。夢の中に又た其の夢を占
い、覺めて後に其の夢なるを知るなり。且つ大覚
ありて後に此の大夢なるを知るなり。愚者は自ら

以て覺めたりと為し、竊竊然として之を知るは固
なるかな(注19)。

【現代語訳】

だから、「五不驗」に抵触しない」真の目覺めた状態
があつて、「五不占」に抵触しない」占うに足るよき夢
を占うことができる。

【語注】

○故必有大覚、而後能占乎大夢、且有大覚而後知此大夢
也……『莊子』では生死の問題を覺夢になぞらえて説
く。『莊子』において、「大覚」があつて初めてわかる
「大夢」とは、大いなる夢としての人生である(注20)。本
節は「五不占」「五不驗」を受けた文脈であることから、
ここでの「大覚」は夢の本原に精通した悟道の状態を
言い、「大夢」は占夢の対象たりうる適切な夢を言うと
考えられる。○竊竊然……こざかしく知ったかぶりをす
る様。

【原文】

【本文】 不然、則覺亦夢也、

【自注】

顔回問於仲尼、孟孫才其母死、居喪不哀、以善喪蓋魯國、回怪之、仲尼曰、吾特与汝其夢未始覺者邪、且汝夢為鳥而厲乎天、夢為魚而沒於淵、不知今之言者、其覺者乎、其夢者乎、

列子、古莽之國、其民多眠五旬一覺、以夢中所為者寔、覺所見者妄、中央之國、其民一寐一覺、以覺所為者寔、夢所見者妄、阜落之國、其民常覺而不眠、周尹氏産、其下有役夫、夜夢為國君、其樂無比、而尹氏則夜夢為人僕趨走、杖撻無不至、尹氏友人曰、苦逸之復數之常也、若欲覺夢兼之、豈可得耶、
列子、欲弁覺夢、惟黃帝孔丘、今無黃帝・孔子、孰弁之哉、

【校異】

① 芸本は、「問於仲尼」を「問仲尼曰」とする。

② 帰本には「者衍邪」とある。ここでは、芸本と『莊子』共に「衍」の字がないため、衍字と見なし削除した。

③ 芸本は、「知」を「識」に作る。

④ 帰本は「莊子」とするが誤り。「列子」に改めた。

⑤⑥ 芸本は、「覺」の下に「之」を付す。

⑦ 芸本は、「夢」の下に「之」を付す。

⑧ 芸本は、「周」の下に「之」を付す。

⑨ 芸本は、「氏」の下に「大治」の二字を付す。

⑩ 芸本は、「耶」を「邪」に作る。

⑪ 帰本は、この部分が字潰れとなっている。ここでは芸本に従い「丘」を補った。

⑫ 芸本は、「子」を「丘」に作る。

* 芸本は、この「列子」の下に「曰」を付す。

【書き下し文】

【本文】 然らざれば、則ち覺も亦た夢なり。

【自注】 『莊子』大宗師「顔回 仲尼に問う、「孟孫才は其

の母死するも、喪に居りて哀しまず。善く喪するを以て魯國を蓋う。回之を怪しむ」と。仲尼曰く、「吾は特ち汝と其の夢の未だ始めより覺めざる者か。且つ汝は夢に鳥と為りて天に厲り、夢に魚と為りて淵に没す。今の言う者は、其れ覺めたる者か、其れ夢みる者かを知らず」と注①。

『列子』〔周穆王〕、古莽の國、其の民多く眠り五旬にして一たび覺む。以えらく夢中の為す所の者は寔にして、覺めて見る所の者は妄なりと。中央の國、其の民一たび寐り一たび覺む。以えらく覺め

て為す所の者は実にして、夢に見る所の者は妄なりと。阜落^{ふらく}の国、其の民常に覺めて眠らず^(注22)。『列子』周穆王、周の尹氏産あり。其の下に役夫あり。夜は夢に国君と為り其の樂しみ比^{たぐひ}なし。而るに尹氏は則ち夜は夢に人僕と為りて趨走し、杖撻^{じょうた}至らざるなし。尹氏の友人曰く、「苦逸の復するは数の常なり。若^{なんじ}覺むるときも夢みるときも之を兼ねんと欲すれば、豈に得べけんや」と^(注23)。『列子』〔周穆王〕、覺夢を弁せんと欲するも、惟だ黄帝・孔子のみ。今や黄帝・孔子なし。孰^{たれ}か之を弁せんや^(注24)。

【現代語訳】

そうでなければ（大覚でもって大夢を占うことができなければ）、目が覚めていてもそれはまだ夢のように朦朧とした状態のままなのだ。

【語注】

○不然、則覚亦夢也……ここでは道家文献のような現実と夢との境界の不確かさについて述べるのではない。目を覚ましている状態（覚）でも、それは「大覚」の域に及ばない、夢のように朦朧とした状態（夢）にあること

を言う^(注25)。輔広の言う「情性治まらず」「昏惑替乱」と同義。○吾特与汝其夢未始覚者邪、且汝夢為鳥而厲乎天、夢為魚而没於淵。不知今之言者、其覚者乎、其夢者乎……母の喪中にありながら哀惜の情を見せない孟孫才を訝しく思う顔回に対し、孔子は生死や夢覚といった相対的価値観を超えた境地を披瀝する。「今話しているお前も、一体覚めた状態なのか、夢みている状態なのかわかったものではない」というのはその一環。○苦逸之復数之常也、若欲覚夢兼之、豈可得耶……苦楽とは、「昼は主人、夜は下僕」のように交互に往来するのが道理であり、昼夜ともに逸楽を享受することなどできないということ。○欲弁覚夢、惟黄帝・孔丘、……獲物の所有権を争う者たち（注24参照）とは異なり、黄帝と孔子だけは夢覚の交錯する世界に翻弄されずに真実を見極められることを言う。「聖人之弁覚夢何邪。直知其不異耳。」（『列子』張湛注）

【原文】

【本文】 大覚者、剖宗、領竅、襲竅、重垠、

【自注】 淮南子、黄帝剖判太宗、竅領天地、襲九竅、重九

垠、枝解葉貫、万物百族、使各有經紀糸位、

【校異】

① 芸本は、「太」を「大」に作る。

② 帰本は「鮮」に作るが、ここでは芸本、『淮南子』が共に「解」とするのに従い改めた。

* 芸本は、「淮南子」の下に「曰」を付す。

【書き下し文】

【本文】 大覚者とは、宗を剖わかち、領りょう竅きやうし、竅かを襲かさね、垠ぎんを重ぬるなり。

【自注】

『淮南子』〔俶真〕、黄帝は太宗を剖ぼ判はんし、天地を竅きやう領りやうし、九竅きやうかんを襲かさね、九垠きやうぎんを重ぬ、万物百族を枝解葉貫し、各おのをして經紀条位注26あらしむ。

【現代語訳】

大覚者は大本を分かち、天地をまるごと治め、九天を積み重ね、九地を重ねる。

【語注】

○領竅……全体を治めること。「竅、通也。領、理也。」（高誘注）○襲竅、重垠……万物が存在する基盤となる天地の形状を作り上げること。「襲」は重ねる。「襲、因也。竅、法也。垠、形也。言因九天九地之形法以通理

也。」（高誘注）注27。○枝解葉貫、万物百族、使各有經紀条位……『淮南子』は、太古の時代より下った神農と

黄帝の治世を、これまで芒昧な状態だった天地万物の別を明らかにして秩序立てた時代としている。

【原文】

【本文】 奚啻弔詭・審測云哉、

【自注】

莊子、長梧子謂瞿鵠子曰、丘也、与汝皆夢也、予謂女夢亦夢也、是其言也、其名為弔詭、晋書、索統善占夢、太守陰澹從求占書、統曰、昔入大学、因一老父為主人。其人無所不知、又匿姓名、有似隱者、統從父老問占夢之術、審測而說、實無書也、

【校異】

① 帰本は「某」に作る。ここでは、芸本と『莊子』に従い「丘」に改めた。

② 芸本は、「女」を「汝」に作る。

③ 帰本、芸本ともに「覚」に作るが、ここでは『莊子』に従い「夢」に改めた。

④ 芸本は、「大」を「太」に作る。

⑤ 帰本は「隠」「者」の間が空格。ここでは芸本に従い、空格を削除した。

* 芸本は、「莊子」「晋書」の下に、それぞれ「曰」を付す。

【書き下し文】

【本文】 奚ぞ審だ弔詭・審測と云うのみならんや。

【自注】

『莊子』〔齊物論〕、長梧子 瞿鵠子に謂いて曰く、

「丘や、汝と与に皆な夢みるなり。予の女を夢みると謂うも亦た夢なり。是れ其の言や、其れ名づけて弔詭と為す」と〔注28〕。

『晋書』〔索統伝〕、索統 占夢を善くす。太守陰澹 従いて占書を求む。統曰く、「昔大学に入り、一老父に因りて主人と為せり。其の人知らざる所なく、又た姓名を匿し、隠者に似ることあり。統 父老に従いて占夢の術を問うも、審らかに測りて説き、実に書なきなり」と〔注29〕。

【現代語訳】

どうして「きわめて奇妙な話」「つまびらかに推しはかった説明」という言い方しかできないものか。

【語注】

○奚 審弔詭、審測云哉……「弔詭」は極めて風変わりなこと。「弔」は至極。「弔、如字。音的、至也。」〔『経典釈文』〕、「詭」は怪異のこと。陳士元にとって、不可解で曖昧な印象が拭えない「弔詭」「審測」は、占夢を語る上で不適当な言葉であったと思われる。『夢占逸旨』において、占夢は充実した知識や技術、そしてより直覺的な明晰さを備えるべきものと考えられていたようである。「大覚」は、占夢におけるそうした理想を凝縮した言葉であろう。○長梧子・瞿鵠子……共に架空の人物で、長梧子は道の体得者、瞿鵠子は孔子の門弟とされる。『莊子』では、長梧子が瞿鵠子の質問を受けて聖人や生死観をめぐる「妄言」を展開する。○予謂女夢亦夢也……『莊子』では万物斉同の観点から夢覚の対立を超えようとする。「これは夢だから〔現実と違って荒唐無稽だ〕」と言っても、現実だと思っているこの時こそ夢かもしれない。夢が現実かよって是非を問うことの愚かさ語る一節。○索統……字は叔徹。敦煌の人。儒学のほか陰陽天文にも明るく、占術に長けていたと言われる〔注30〕。『晋書』の伝記には索統が優れた占夢者であることを示す複数の逸話が見える。○実無書也……陰澹と索統の会話から、占夢には占夢書の使用が当然とされて

いたことがわかる^(注31)。一方で、索統のように書物によらない占夢も行われていたことは興味深い。索統の占夢法は、陰陽五行説・易論・象徴解釈や析字法を駆使するものであり、広範な知識なしには成立しない。「総合的占夢」とも言える体系を持っていたと言える。

訳者注

(1) 「春、原屏放諸(趙嬰) 齊。嬰曰、我在故欒氏不作。我亡、吾二昆其憂哉。且人各有能有不能。舍我何害、弗聽。嬰夢天使謂已祭余、余福女。使問諸士貞伯。貞伯曰、不識也。既而告其人。曰、神福仁而禍淫。淫而無罰、福也。祭其得亡乎。祭之明日而亡。」(『左伝』成公五年)

(2) 身分や品性によつて夢も異なるという観念は、『潜夫論』夢列篇の「人夢」に近い。「貴人夢之即為祥、賤人夢之即為妖、君子夢之即為榮、小人夢之即為辱。此謂人位之夢也。」(『潜夫論』夢列) 特に「帝王」「聖賢」の夢(黄帝・堯・舜・孔子など) についての記録は伝世文献にも豊富に見えるが、紙幅の都合上、資料の紹介は割愛する。

(3) 「屠岸」賈不諱而擅与諸將攻趙氏於下宮、殺趙朔・趙同・趙括・趙嬰齊、皆滅其族。」(『史記』趙世家)、「景公」十七年、誅趙同・趙括、族滅之。」(『史記』晋世家)、「晋趙莊姬為趙嬰

之亡故、譜之于晋侯曰、原屏將為乱、欒卻為微。六月晋討趙同・趙括、武從姬氏畜于公宮。」(『左伝』成公八年)

(4) 「京兆人董豐游学三年而返、過宿妻家。是夜妻為賊所殺、妻兄疑豐殺之、送豐有司。豐不堪楚掠、誣引殺妻。融(符融) 察而疑之、問曰、汝行往還、頗有怪異及卜筮以不。豐曰、初將發、夜夢乘馬南渡水、返而北渡、復自北而南、馬停水中、鞭策不去。俯而視之、見兩日在於水下、馬左白而湿、右黑而燥。寤而心悸、竊以為不祥。還之夜、復夢如初。問之筮者、筮者云、憂獄訟、遠三枕、避三沐。既至、妻為具沐、夜授豐枕。豐記筮者之言、皆不從之。妻乃自沐、枕枕而寢。融曰、吾知之矣。周易坎為水、馬為離、夢乘馬南渡、旋北而南者、從坎之離。三爻同變、變而成離。離為中女、坎為中男。兩日、二夫之象。坎為執法吏。吏詰其夫、婦人被流血而死。坎二陰一陽、離二陽一陰、相承易位。離下坎上、既濟、文王遇之囚羈里、有札而生、無札而死。馬左而湿、湿、水也、左水右馬、馮字也。兩日、昌字也。其馮昌殺之乎。於是推檢、獲昌而詰之、昌具首服曰、本与其妻謀殺董豐、期以新沐枕枕為驗、是以誤中婦人。」(『晋書』符融伝) 夢から犯人を特定した符融(？) 三八六) は、前秦の第三代皇帝符堅の季弟。符堅からの信用も厚く裁判に優れていた。

(5) 「詳占夢之意、先王致察於天人之際、可謂密矣。惜乎、古法不伝也。後世之人、情性不治。昼之所為猶且昏惑、昏不自知覺、

則其見於夢寐者、率多紛紜乖戾、未必与天地之氣相流通。縱有徵兆之可驗者、亦須遲廻隱約、必待既驗、而後可知。古法若存、未必能尽占也。」四庫全書所収「詩童子問」を使用。

(6) 「或曰、夢之有占何也。曰、人之精神与天地陰陽流通。故昼之所為、夜之所夢、其善惡吉凶、各以類至。是以先王建官設厲、使之觀天地之會、弁陰陽之氣、以日月星辰占六夢之吉凶。獻吉夢、贈惡夢。其於天人相与之際、察之詳而敬之至矣。」(朱熹「詩集伝」小雅・斯干、「天人同流相応而不違、先王立官、以觀妖祥、弁吉凶、所以和同天人之際、使之無間也。」(王晦叔「周礼集説」卷五賦履)

(7) 「夜夢最可驗学。其夢也邪、昼有邪想也、其夢也漫、昼有漫想也。」(「六書精蘊」卷五) 統修四庫全書所収「六書精蘊」を使用。

(8) 「初、声伯夢涉洹、或与己瓊瑰食之。泣而為瓊瑰、盈其懷、從而歌之曰、濟洹之水、贈我以瓊瑰、婦乎婦乎、瓊瑰盈吾懷乎。懼不敢占也。還自鄭、壬申、至于狸脈而占之曰、余恐死、故不敢占也。今衆繁而從余三年矣。無傷也。言之之莫而卒。」(「左伝」成公十七年伝) 「伝戒数占夢。」(杜預注)

(9) 「正義曰、声伯之意、以初得此夢謂凶在己懼不敢占。今衆既繁多而從余三年。余之此夢凶災散在衆人、不在己也。故云無傷。」(「左伝」成公十七年、孔穎達疏) また、声伯の言う「余恐死、故不敢占也」は、夢を黙秘することで凶兆の発動を抑制しよ

うとする態度があった可能性も示している。凶夢の黙秘を勧める記述は敦煌解梦書群にも見える。「凡人夜得噩夢、早起且莫向人説。」(S. 三九〇八「新集周公解梦書」)

(10) 風驚の場合、心臓の気血不足によるバランスの乱れに乗じて風邪が体内に侵入することで発作的な症状が現れる。「夫風驚者、由体虚、心氣不足、為風邪所乘也。心臓神而主血脈、心氣不足則血虚。虚則血氣乱、血乱則氣并於血、氣血相并、又被風邪所乘、故多驚、心神不安、名曰風驚也。」(「太平聖惠方」卷二十) 「太平聖惠方」は宋の王懷隱らが編纂した医書で、臨床の立場から症例や処方について記す。全百卷。本稿では「太平聖惠方」上下(人民衛生出版社、一九八二年)を使用。

(11) 湯浅邦弘「中国古代の夢と占夢」(「島根大学教育学部紀要人文・社会科学」二二―二、一九八八年)

(12) 『夢占逸旨』の言う「精誠」については、程伊川が示すような宋学の体系における「誠」との関連にも留意すべきであろう。宋代における「誠」は、五徳の基盤としての根本的徳目という特徴が明確であった(藤井倫明「宋学における「聖」と「誠」―自然性への志向―」注十七、「中国哲学論集」二三、一九九七年)。中でも『中庸』の「誠」は、天地鬼神と人とを貫通する根本原理(道)として理解されており、これは「夢占逸旨」の世界観にも通ずると考えられる。

(13) 死者(祖先)の靈魂(季路問事鬼神。」「論語」先進)、陰

陽二気による造化の理（「鬼神者造化之迹也。」）『周易程氏伝』
第一、「鬼神者、二気之良能也。」張載『正蒙』太和など。

(14) 「問、謙象云云。鬼神是造化之跡、既言天地之道、又言鬼神、何邪。曰、天道是就寒暑往來上説、地道是就地地形高下上説、鬼神是就禍福上説、各自主一事而言耳。」（『朱子語類』卷七十、易六 謙）

(15) 「曆譜者、序四時之位、正分至之節、会日月五星之辰、以考寒暑殺生之實。故聖王必正曆數、以定三統服色之制、又以探知五星日月之会。凶阨之患、吉隆之喜、其術皆出焉。此聖人知命之術也、非天下之至材、其孰与焉。道之乱也、患出於小人而強欲知天道者、壞大以為小、削遠以為近、是以道術破碎而難知也。」（『漢書』藝文志）

(16) 「元鳳三年、太史令張寿王上書言、曆者天地之大紀、上帝所為。伝黄帝調律曆、漢元年以来用之。今陰陽不調、宜更曆之過也。……案漢元年不用黄帝調曆、寿王非漢曆、逆天道、非所宜言、大不敬。」（『漢書』律曆志）漢の武帝時（太初元年）の改曆をめぐる、張寿王が新曆（太初曆）反対の立場から妄説を振ったこと。

(17) 「天道全体、至遠至大、得其一端者為方術、得其全体者為道術。壞大為小、制遠為近、皆方術之所為。今之星命家、皆所謂小人而強欲知天道者。」（姚明燿撰『漢書藝文志注解』）

(18) 「安祿山之叛也、玄宗忽遽播遷於蜀、百官与諸司多不知之。

有陷在賊中者、為祿山所脅從、而黃幡綽同在其數、幡綽亦得出入左右。及收復、賊党就擒。幡綽被拘至行在、上素憐其敏捷積之。有於上前曰、黃幡綽在賊中、与大逆門夢、皆準其情、而忘陛下積年之恩寵。祿山夢見衣袖長忽至階下、幡綽曰、当垂衣而治之。祿山夢見殿中榻子倒、幡綽曰、革故從新、推之多此類也。幡綽曰、臣美不知陛下大駕蒙塵赴蜀、既陷賊中、寧不苟悅其心、以脱一時之命。今日得再見天顏、以与大逆門夢、必知其不可也。上曰、何以知之。對曰、逆賊夢衣袖長者、是出手不得也。又夢榻子倒者、是胡不得也。以此臣故先知之。上大笑而止。」（五代）王仁裕等撰・丁如明輯校『開元天寶遺事十種』（上海古籍出版社、一九八五年）所収の『次柳氏旧聞』を使用。

(19) 「方其夢也、不知其夢也。夢之中又占其夢焉、覺而後知其夢也。且有大覺而後知此其大夢也。而愚者自以為覺、竊竊然知之。君乎、牧乎、固哉。」（『莊子』齊物論）

(20) 「大覺」の語は『首楞嚴經』にも「空生大覺中」と見えており、これは宋代士大夫の間でも関心の対象となっていたようである。「渠雖說空、又要和空皆無、如曰空生大覺中之類。」（『朱子語類』卷二六）「空生大覺中」とは、空が衆生の持つ仏性の中に生まれることを言う。また、林希逸も禪宗の用語を援用して「大覺」を解釈しており、当時において「大覺」の語が複合的な解釈を通じて理解されていたことがわかる。「夢覺

之間、變幻如此。方其夢也、不知為夢、又於夢中自占其夢、既覺而後乃知所夢所占皆夢也。此等處皆曲盡人情之妙。……大覺、見道者也、禪家所謂大悟也。」（林希逸『莊子虞齋口義』）

(21) 「顏回問仲尼曰、孟孫才、其母死、哭泣无涕、中心不戚、居喪不哀。无是三者、以善處喪蓋魯國。固有无其美而得其名者乎。回壹怪之。仲尼曰、夫孟孫氏之矣、進於知矣。唯簡之而不得、夫已有所簡矣。孟孫氏不知所以生、不知所以死。不知就先、不知就後。若化為物、以待其所不知之化已乎。且方將化、惡知不化哉。方將不化、惡知已化哉。吾特与汝、其夢未始覺者耶。且彼有駭形而无損心、有且宅而无情死。孟孫氏特覺、人哭亦哭、是自其所以乃。且也相与吾之耳矣、庸詎知吾所謂吾之乎。且汝夢為鳥而厲乎天、夢為魚而沒於淵。不識今之言者、其覺者乎、其夢者乎。造適不及笑、獻笑不及排、安排而去化、乃入於寥天一。」（『莊子』大宗師）

(22) 「西極之南隅有國焉、不知境界之所接、名古莽之國。陰陽之氣所不交、故寒暑亡弁。日月之光所不照、故晝夜亡弁。其民不食不衣而多眠、五旬一覺、以夢中所為者美、覺之所見者妄。四海之齊、謂中央之國、跨河南北、越岱東西、万有余里。其陰陽之審度、故一寒一暑。昏明之分察、故一晝一夜。其民有智有愚、万物滋殖、才芸多方。有君臣相臨、礼法相持。其所云為不可称計。一覺一寐、以為覺之所為者美、夢之所見者妄。東極之北隅有國曰阜落之國、其土氣常燠。日月余光之照。其

士不生嘉苗、其民食草根木实、不知火食、性剛悍、彊弱相藉、貴勝而不尚義、多馳步、少休息、常覺而不眠。」（『列子』周穆王）

(23) 「周之尹氏大治產、其下趣役者、侵晨昏而弗息。有老役夫筋力竭矣、而使之彌勤。昼則呻呼而即事、夜則昏憊而熟寐。精神荒散、昔昔夢為國君。居人民之上、總一國之事。遊燕宮觀、恣意所欲、其樂無比。覺則復役。人有慰喻其勲者、役夫曰、人生百年、晝夜各分。吾昼為僕虜、苦則苦矣。夜為人君、其樂無比。何所怨哉。尹氏心營世事、慮鍾家業、心形俱疲、夜亦昏憊而寐。昔昔夢為人僕、趨走作役、無不為也。數罵杖撻、無不至也。眠中唵嚙呻呼、徹旦息焉。尹氏病之、以訪其友。友曰、若位足采身、資財有余、勝人遠矣。夜夢為僕、苦逸之復、數之常也。若欲覺夢兼之、豈可得邪。尹氏聞其友言、寬其役夫之程、減己思慮之事、疾並少間。」（『列子』周穆王）

(24) 「鄭人有薪於野者、遇駭鹿、御而擊之、斃之。恐人見之也、遽而藏諸隍中、覆之以蕉。不勝其喜。俄而遺其所藏之處、遂以為夢焉。順塗而詠其事、傍人有聞者、用其言而取之。既帰、告其室人曰、向薪者夢得鹿而不知其處。吾今得之、彼直真夢矣。室人曰、若將是夢見薪者之得鹿耶。記有薪者邪。今真得鹿、是若之夢真邪。夫曰、吾捫得鹿、何用知彼夢我夢邪。薪者之帰、不厭失鹿、其夜真夢藏之之處、又夢得之之主。爽旦、案所夢而尋得之。遂訟而爭之、帰之士師。士師曰、若初真得鹿、妄

謂之夢。真夢得鹿、妄謂之寔。彼真取若鹿、而与若争鹿。室人又謂夢初人鹿、無人得鹿。今挽有此鹿、請二分之二。以問鄭君。鄭君曰、嘻。士師將復夢分人鹿乎。訪之國相。國相曰、夢不夢、臣所不能弁也。欲弁竟夢、唯黃帝孔丘。今亡黃帝孔丘、孰弁之哉。且恂士師之言可也。」〔列子〕周穆王)

(25) 「大覺」から外れる者「五不驗」に該当する者である。『夢占逸旨』において「覺」「夢」よりも高い次元に設定された「大覺」「大夢」は、天地との均衡を保ちながら行われるべき占夢を語る上で不可欠な概念であったと考えられる。

(26) 「及世之衰也、至伏羲氏、其道昧昧芒芒然、吟德懷和、被施頗烈、而知乃始昧昧淋淋、皆欲離其童蒙之心、而覺視於天地之間、是故其德煩而不能一。乃至神農黃帝、剖判太宗、竅領天地、襲九竅、重九垠、提挈陰陽、媵抗剛柔、枝解葉貫、万物百族、使各有經紀條貫、於此万民雖睢盱然、莫不疎身而載聽視。」〔淮南子〕俶真)

(27) Richard Strassberg氏は「竅」を“principles of nature”、「重」を“devote attention”、「九垠」を“nine forms of things”とする(“Wandering Spirits: Chen Shiyuan's Encyclopedia of Dreams”/University Of California Press, Ltd.London, England 2008)。本訳注もStrassberg氏と同様、「竅」と「垠」をそれぞれ理法的、物質的な意味で解釈するが、「重」に対する氏の解釈についてはやや疑問が残る。

(28) 「瞿鵠子問乎長梧子曰、吾聞諸夫子、聖人不從事於務、不就

利、不違害、不喜求、不緣道。無謂有謂、有謂無謂、而遊乎塵垢之外。夫子以為孟浪之言、而我以為妙道之行也。吾子以為奚若。長梧子曰、是黃帝之所聽熒也、而丘也何足以知之。

且女亦大早計、見卵而求時夜、見彈而求鴉炙。予嘗為女妄言之、女以妄聽之。奚旁日月、挾宇宙。為其吻合、置其滑潛、以隸相尊。衆人役役、聖人愚屯、參万歲而一成純。万物尽然、而以是相蘊。……夢飲酒者、且而哭泣。夢哭泣者、且而田獵。方其夢也、不知其夢也。夢之中又占其夢焉、覺而後知其夢也。

且有大覺而後知此其大夢也。而愚者自以為覺、竊竊然知之。君乎、牧乎、固哉。丘也與女皆夢也。予謂女夢亦夢也。是其言也、其名為弔詭。」〔莊子〕齊物論)

(29) 「太守陰澹從求占書、統曰、昔人太学、因一父老為主人、其人無所不知、又匿姓名、有似隱者。統因從父老問占夢之術、審測而說、實無書也。」〔晋書〕索統伝)

(30) 「索統、字叔微、敦煌人也。少遊京師、受業太学、博綜經籍、遂為通儒。明陰陽天文、善術數占候。司徒辟、除郎中、知中國將乱、避世而歸。鄉人從統占問吉凶、門中如市、統曰、攻乎異端、戒在害己。無為多事、多事多患。遂說言虚說、無驗乃止。惟以占夢為無悔吝、乃不逆問者。」〔晋書〕索統伝)

(31) 『晏子春秋』には、占夢者が景公の夢を占うために占夢書を取りに行こうとして晏子に止められる場面がある。「景公病水、

臥十數日、夜夢与二日闕不勝。晏子朝、公曰、夕者夢与二日闕、而寡人不勝、我其死乎。晏子对曰、請召占夢者。出于闔、使人以車迎占夢者。至曰、曷為見召。晏子曰、夜者、公夢二日与公闕不勝。公曰、寡人死乎。故請君占、是所為也。占夢者曰、請反具書。晏子曰、毋反書。公所病者陰也、日者陽也。一陰不勝二陽、故病將已。以是对。」(内篇雜下) 吳則虞撰『晏子春秋集釈』(中華書局)を使用。